



## I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。協力者から、分科会をとおして、「部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているか」ということを大事にしながら、事実と実践に基づく討論を進めていきたいことを呼びかけ、討議の柱を確認し、報告・討論に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

### —報告1—⑥

#### クラスが心地よく過ごせる

居場所になることを願って（高知県人教）

#### —主な質疑と意見—

兵庫 4歳児における課題や注意していることは？

報告者 気もちではなく、知っている言葉で言うてしまうことがあり、言葉がたりないことがある。友だちとのかかわり方を丁寧に知らせていくことや、集団活動が本格化する前に、保育者がモデルとなってスキンシップなどを行っている。

福岡 レポートは6月の姿だが、今の姿は？これからどう取り組んでいきたいのか教えてほしい。

報告者 当初はBがAの上には立っていると感じていたが、自分のしたいことを本音で伝えるなど、互いに肯定的にとらえることができるようになってきている。自分のしたいことが楽しいと感じられるようにしていきたい。

協力者 保護者とのやりとりを詳しく教えてほしい。

報告者 Aは新しい保育所で友だちの名前を覚えづらいと感じたので、保護者に伝えたところ、前の保育所でも2～3人だったと聞いた。手遊びを使って、身近にいる友だちの名前を覚えるようにしたところ、家でもその歌を歌っていると聞き、一緒に成長を喜ぶことができた。BはA以外の友だちと遊べているか、保護者も心配していた。保育所での様子を保護者に伝え、保護者からも家でA以外の友だちの名前を出してもらおうなど、丁寧にわかってくれている。

三重 レポートからは、AやBの姿から推測する表現が多いと感じた。それぞれの遊びの経験や思いなどをくみとるための手立てなどあれば教えてほしい。

報告者 その言葉や行動の背景にある思いを保育

者が代弁することで、共有するようにしている。昨年と比べると大きな成長を感じている。

高知 同じ保育所の職員。4歳児ならではの葛藤経験がある。保育は毎日の繰り返し。子どもの姿を見ながら、言葉を聞きながら一緒に過ごすことを大切にしている。

協力者 私は小学校に勤務しているが、この会場にもいろんな立場の方がいる。自分の実践やご自身のことと重ね合わせて、ご意見をいただきたい。

福岡 私は小学校で勤務しているが、この報告のように就学前で一人ひとりと丁寧にわかっているから、小学校でのびのびと生活できていると思った。心地よく過ごせる場所にするために、心がけていることがあれば教えてほしい。

報告者 子どもの発信する言葉や行動をオーバーでも肯定的に認めて声をかけている。

三重 AとBの立ち位置では、Bの方が上と思っているか、それとも逆と思っているか。

報告者 4月はBが上というか、AはしたいことがあってもあきらめてBに合わせているという姿があった。BはこうやったらAがしてくれるというのがあったのかもしれない。BもAもやりたいことが自分の意思でできるよいかかわっていった。

三重 そこに至る対等に言える関係性になるまで、どうかかわられていたか、知りたい。

報告者 無理に遊びに誘うのではなく、保育者からさりげなく誘うことを意識していた。AやBに限らず、一人ひとりに気持ちを聞いて相手に伝えるようにしている。

福岡 Bの他の子どもとの関係性は？

報告者 Bはアレルギーの関係から、食事をみんなと別テーブルで食べることがあったが、保護者とも相談し、みんなと机をつけて食べる時間を増やしていった。それからA以外にもスキンシップをとるようになり、最近はA以外の友だちと遊ぶ姿も広がっている。

協力者 「居心地がいい」という言葉は、私たちはなかまづくりの中でたくさん使うが、「どういう姿が居心地がいいのか」「どういうなかまが居心地がいいのか」という中身を問うことが必要ではないか。また総括討論の中でもご意見をいただけたら。

### —報告2—⑤

「おじいちゃん おばあちゃんにあいたいな」

（愛媛県人教）

#### —主な質疑と意見—

福岡 交流活動を20年以上続けられているが、20年前の一番最初に行こうとした時の思い・願いは引き継がれているか、それを全職員で共有しているか。

報告者 施設創立の時はいなかったが、保育22年目で、交流の様子は見てきた。最初は招待したのが始まりと聞いている。一方的な交流とならないよう、一緒に進めている。園全体では思いを共有し、全職員でアイデアを出しながら、大切なものとして

継続している。

**大阪** この交流を通して、自分の祖父母や身近な高齢者とのかかわりが変わったエピソードがあれば教えてほしい。また、打合せの時、ホームのスタッフとされたのか、当事者の声を反映されているか教えてほしい。

**報告者** 交流で歌った歌を、自分の祖父母にも歌ったことを聞いている。打ち合わせではスタッフの方と、利用者の方の様子を聞きながら行っている。直接聞けない方もいるが、ホームで普段している手遊びやぬり絵など、一緒にできそうな内容になるよう工夫はしている。

**大阪** 職員間で一緒にやっていくための意識の確認や取組の継続について、また先生方の普段の声かけなどについて教えてほしい。

**報告者** この園では職員の異動はなく、他のクラスの様子も分かる。連携をとってアイデアを出している。子どもたちの声を受け止め、形にしていくということは心がけている。

**大阪** 交流会後、子どもたちどうしや、ゆう君をはじめとする他の子どもたちとのかかわりはどのように変容したのか。

**報告者** 自分が大切にされるという経験を通して、友だちにも優しく声をかけるようになったなどの姿がある。交流では本当に喜んでくれるので、子どもたちもあたたかい気持ちになり、私たちはうれしい気持ちになる。

**三重** 肯定的な出会いをなるべく小さいうちにいろんな立場の人とさせることで、差別を見抜く力にもつながっていくと思う。反対にマイナスな出会いをしてしまうと、知らず知らずのうちにひとくくりにしてしまう怖さもある。

**香川** 近くの施設を何度も訪問することで、「いつもいた〇〇さんがいない」などの場面に直面することがあったか、またそのような場合に先生はどうとらえて伝えていったのか。

**報告者** 訪問した時に、どう対応するか、想定してどう声をかけるか準備をして行った。「〇〇さんがいない」という場面は実際なかったが、子どもたちはどんなことを喜んでくれたかは覚えていて、「今度またこの歌を歌おう」という姿は見られた。

**愛媛** ICT やタブレット等をどのように活用したか。

**報告者** 園と施設でオンラインで交流した。

**愛媛** ゆう君の成長は想定していたものか。またより大きな成長のために気を付けていたことがあれば教えてほしい。

**報告者** ホームとの交流だけで成長したわけではない。誰一人取り残さない保育を心がけ、その子の好きな遊びを取り上げて行うことは多い。それで自信をつけ、卒園してから作ったものを持ってきて見せてくれたこともあった。

**協力者** 幼少期からいろんな立場の方と出会う機会をつくることで、高齢者を弱者とみるのではなく、子どもたちの純粋な思いやり・優しさを伸ばしていくために育てていくことの必要性が確認された報

告であった。

### —報告3—⑦

「お父さんみたいになりたい」（大阪府人連）

#### —主な質疑と意見—

**三重** Aの保護者が、「おれから話すわ」と言ったのは、どのような話であったのか。

**報告者** 後日、Aが元気な姿になっていたことを保護者に伝えた。その時に、「たぶん話してくれたと思うけど、それをきっかけにがんばっています」と伝えた。Aは保護者から心配してもらって、またがんばろうと思えたのではないか。

**香川** 子どもだけでなく、地域や保護者もまきこんだ学習の場がある。そのような場をどのようにつくってきたのか。また、Cに対してのまわりの見方やつどいの活動後の変化などがあれば教えてほしい。

**報告者** 地域の方からも声をかけてもらい、教職員も保護者も活動に参加している。そこに子どもたちもいて、一緒に活動している。Cはとてもしんどい様子で、大人に対しても突発的なことが処理できずぶつかることがあった。しかし、まわりの生徒は「そんなこともあるけど、優しいやつやねん」という見方をしており、Cのことを思う学年の姿がいい雰囲気であった。Cはそれから体育大会でも太鼓をたく役に立候補するなど、応援してくれる存在がCの変容につながったと思う。

**三重** なかまとともに人権学習をし、真剣な姿に言葉を返す、まさになかまづくりの実践であった。Cに対してなかまから声を返す姿などあったか。

**報告者** 3年では自分のクラスではなかったのですが分からないが、思いを語る場はC自身も大事にしている。点検デーでは、みんながCを呼びにいて大事にしているし、Cもなかまのことを大事に思っている。

**兵庫** 修学旅行の全体学活について、自分にはそのような経験がないので、詳しく教えてほしい。

**報告者** クラスで思いを語り合う場は学年で毎学期時間をとっている。教職員としても、語れる、語ってもいいという雰囲気をつくることを大事にしている。修学旅行では、長崎の語り部さんから話を聞かせてもらったことをきっかけとして、「自分の思いも伝えてみないか」と伝えた。その中で、自分の性に違和感がある生徒が語ったことがあった。「この学年やったら聞いてくれそうやから、話そうと思った」と教えてくれたが、私たちもびっくりした。受け止められる雰囲気が学年にあったのだと思う。

**兵庫** 自分が話したいテーマで話すのか。

**報告者** 自分が悩んでいることなど話しができたらうれしいと伝え、輪になって話している。その思いに対して返したい子はいるかと聞いたり、サポートしたりしている。

**神奈川** 日頃からどんな言葉がけをしたり、何を大切にしたりしているのか。また、地域の差別については繊細な内容が多く、どのように扱ったらよい

か悩んでいるが、どこまでどのように扱ったのか。  
**報告者** コミュニケーションを大事にしている。先生が見てくれている、気付いてくれるというのは信頼関係につながると思っている。また、知らないことが一番差別のきっかけになる。正しいこと、何があったのかを「知る」ことから始めることを大事にしている。

**神奈川** それは一般的な内容なのか、この地域にはこんな差別があるという内容なのか。

**報告者** もちろん一般的な内容も行う。部落問題学習では、まちたんけんなどで、がんばっている人などにインタビューをしたり、新聞をつくったりしている。その中で、これだけあったかい町やねんなど感じたところから学習が始まると思っている。

**三重** 人権学習が校内で確立されているが、その中学校でずっとされているのか、先生自身が広げたのか。

**報告者** 私ではなく、中学校としてやってきている。自分も赴任してから自分自身が知らないことが怖いことだと思ひ、地域の学習会に参加し、「こういうことを大事にしてるんや」と理解しながら、今あるものに自分の思いをのせて実践している。

**兵庫** 報告を聞いて、この場に来てよかったとつくづく思う。自分の思いや弱みを言える学年や人権教育の基礎をつくられていることに敬意を表して話さずにはいられなかった。

**三重** AやBが地域学習のインタビューで差別を受けていることにショックを受けたとあったが、これまでに保護者などと事前に営みがあったのでは。

**報告者** もちろん、施設や保護者と深いつながりがあり、今のAとBなら話しても大丈夫、もっと強く生きてほしいという思いをふまえて、しっかりと事前準備を行ったうえで実践している。

**大阪** 中学校を卒業した後、どうするのかとういことを大切に思っている。知ることは大切だが、その後どう行動できるか考えないとなつながついていかない。性についてカミングアウトした当事者の子を支えるような行動化の取組について教えてほしい。

**報告者** その子も震えて涙を流しながら語った。終わった時、みんなが集まって「話してくれてありがとう」と抱きしめている姿があった。なかまづくりは、なかまのままで終わってはいけなない。外に巣立たせていかなければならない。しんどい時に助けてと言える力が3年で育った。それは意識して取り組んだ。

**大阪** 性に違和感のある子、それはこの世の中の社会構造の仕組みがそうさせてしまっている。修学旅行でも入浴や着替え、班分けなどの場面があるが、そこに気付けるかどうかが大切。

**報告者** 帰ってきてから、もう一度ジェンダー平等や生きづらさなどの話をした。

**協力者** 報告の中で、自分たちの困り感をなかまどうしで共有して支え合っていくことができるころまでは実現したが、それをどういうふうで解決していけるのかを学校も子どもたちもどう考えてい

けるのかという提案をいただいた。

## 〇1日目の総括討論

**鹿児島** 「心地よく過ごせる」というのは、Bさんにとってどういう状態であったか。

**報告者(高知)** 特定の友だちがいる空間だけではなく、クラスそのものの中で、思いが通ったり、受け止められたりする場所になってほしいという願いをもってかかわってきた。取組の中で、代弁者になったり、一緒になって活動したりする状態が、受け止められるとういきっかけになっていったと思う。

**神奈川** 報告にあった A、B、C 以外の生徒の様子はどうか。声かけやかかわりなどあれば。

**報告者(大阪)** 総合や人権学習の中で、子どもたちの声を拾えたら、翌日学級通信で返すようにしてきた。応援してるよという声など共有できたと思う。

**愛媛** 公立の学校では異動もあり、教職員が同じ熱量で取り組むことが難しい場合もある。次世代にどう熱い思いを伝えていくのか。

**報告者(大阪)** 自分の熱量が合わないこともある。だからこそ、違う人の考えも知れる。一緒にやる中で、自分はこういう考えを大事にしていると伝えている。

**報告者(愛媛)** 一人ではできない。園のチームワークを大事にし、相談しながら取り組んでいる。

**報告者(高知)** 職員室などの何気ない話をしていの中で、大勢の人の中では言えないことも少ない人の中では言えることもある。

**神奈川** 日々のコミュニケーションが大事と改めて考えた。背景をとらえていくことは大事。どのような状況が、居心地がよいのか。自分の学校でも職員全体で考え、取り組んでいきたい。

**大阪** 今、報告者の中学校にこどもたちが行く小学校に勤務している。明るい展望をもって取り組むことが大切。この生き方がかつこいいなというロールモデルがあることも大事。就学前、中学校と連携しながら小学校でも積み重ねていきたい。

**大阪** 当事者といいい出会いをすることも大事だが、その理解者とも一緒に出会わせることも大事。報告にあった A はお父さんという理解者がよきモデルとなり、さらにレポートの中で、自分自身との出会い直しという言葉も出てきて、参考になった。

**滋賀** 受け止めてもらえるなかまがいることは大切。現在、就学前で勤務しているが、小・中とどう成長しているのかがよく分かった。0歳児は、言葉はないが、こんなふうにして泣いているのだなと考える安心できる大人とのつながりも大切だと思う。

**大阪** 3本の報告や質疑から、当事者性について考えさせられた。ちょっとした言動の裏にあるくらしや背景を一緒に活動する中でみとることの大切さ、さらにその向こう側にある差別構造や不条理などをみとることが人権教育のスタートになる。A の

保護者にしゃべりたくないことをいつまでしゃべらせるのか。差別があるから話さざるを得ない。このことは全国全ての学校・園・所で考えていかなければならない。

大阪 今日来てよかった。人権教育が深いことを改めて感じた。

大阪 報告者の後、人権担当として赴任した。出会いの場をたくさん設けているが、出会う前にしっかりした取組を行うようにしている。また、その出会いの中で、カッコいい生き方、反差別の生き方にふれさせ、あかんことはあかんも大事だが、それよりもあの人の生き方っていいよねという出会わせ方をしていきたい。

## 〇1日目のまとめ

高知県からは、「クラスが心地よく過ごせる居場所になることを願って」という報告をしていただいた。遊びの中での子どもの言動から、その背景にある不安や苦手なこと、葛藤を丁寧に見取り、子どもたちをつなぎ直していかれた。子どもたちがクラスの中で、お互いにやりたいことが安心してできること、自分の言葉がちゃんと受け止められること、そしてその喜びを感じられることが「居心地のいい、安心できる居場所」なのだと言われた。子どもたちが心地よく過ごせる対等で安心できる居場所は、自然発生的にできるというものではない。子どもたちの背景にあるものや本当の思いを読み取り、時に見守り、時に代弁しながら子どもたちをつないでいくことの大切さが確かめられた報告だった。

愛媛県からは、「おじいちゃん、おばあちゃんにあいたいな」という報告をしていただいた。人と人との関わりの大切さを保育の中心に据え、園内だけではできない様々な交流を大切にしてくられた園では、コロナ禍で途絶えていたグループホームの高齢者との交流を再開させた。プレゼントや手紙を渡したり、一緒に遊んだりする中で、集団生活や友だちとの関わりが苦手な子が積極的に活動したり、言葉の不自由な高齢者や認知症の高齢者とも変わらず関わったりするのは、「何かしてあげたい」という一方通行の「思いやり」ではなく、おじいちゃん、おばあちゃんからも大事にされたという双方向の、「人と人が大切にしようということ」を子どもたちが学んでいるからではないだろうか。またそれは、高齢者を「弱者」と捉えない人権感覚でもある。私たちは、このような「交流」も人権学習として考えなければならない。なぜ「交流」させるのか、子どもたちにどんな力や仲間とのつながりをつくっていくのか、社会問題や人権課題としてどんな思いをもって取り組むのか、子どもたちにつかませたいことや、自分や身近な存在に重ね、考えさせたいことはどんなことなのかなど、しっかり話し合う必要がある。

大阪府からは、「お父さんみたいになりたい」という報告をしていただいた。差別を許さない生き方を学ぶ地域学習で、AはBと一緒に、現在も残っ

ている差別について知り、驚いた。地域の人を思いを知り、AとBは「この地域が好きだから」と、さらに前向きに活動に取り組むようになった。また、保護者からの聞き取りで、Aは、部落差別と向き合い、反差別の生き方を語る父親に「お父さんみたいになりたい」という誇りをもち、「仲間」にこだわっていった。

討論では、地道な仲間づくりの取組や小学校から積み上げられてきた人権学習が、しんどいことや自分の思いを「この仲間なら」と安心して出し合える反差別の仲間づくりにつながる事が確かめられた。また、部落問題について正しく知ることが差別をなくしていく力になり、知った後、どう行動していくのが大切だというご指摘もいただいた。このような取組をするには、私たち自身が差別の現実や保護者や地域、当事者の思いや願いを受け止め、自分の課題としてどう取り組むのか、その立ち位置を問うことが大切である。またこのような部落問題学習や反差別の仲間づくりは、部落があってもなくても行わなければならないということも確認された。

## —報告4—⑧

「こうであるべき」から「これもいいやん」への変換～しずなとの出会いをとおして～

(大阪市人教)

### —主な質疑と意見—

大阪 父との関係性が変わってきたが、どのようなことが改善されたのか。また、しずな以外のまわりの子たちへの声かけはどのようにしたのか。

報告者 父と話をする中で、父自身も子どもたちの大切さに気づき、これからがんばると教えてくれた。それから学校にもよく来てくれるようになり、父と私がつながっているということが、しずなの中で大きかったのではないかなと思う。また、まわりの子たちへは、年間を通して、いいところや苦手なところがあることはみんなも同じであることを伝えていった。また、とにかくがんばっていたらほめるということを繰り返した。全部受け止めてもらえるということが安心感につながったと思う。

滋賀 父と母のけんかを見ていることは面前DVIにつながると思うが、関係機関との連携など、組織的にどのように対応したのか。

大阪 報告者の学校長で当時教頭であった。関係機関と何度もケース会議を重ねるなど連携していた。本人はなかなか自分の本音を言わなかったが、特に養護教諭のかかわりは大きかった。

大阪 当時、入学の際、教務主任をしていた。就学前からの引継ぎは何度も行った。入学してからは学校全体で話し合っ、かかわっていった。

三重 子どものがんばりを認める環境は、大きな人権の授業の中での取組でできたのか。他の児童どうしのつながりがすでにあって変わったのか。もう一つは、先生の生き方が少しずつ変わっていくレポートであったが、これまで完璧じゃなきゃいけない

と思っていた自分をつくってきたのは何だったと思うか。

**報告者** 本をよく読んで読み聞かせをしていた。その中でいろんな子がいるんだよという本もたくさん読んだ。保育所から同じ子が多く、つながりは強かった。そのまわりの子とのつながりも意識しているんな友だちがいるんだよということは伝えてきた。

自分の尊敬している両親から、ルールはみんなのためやから守らなあかんということをお小さい頃から言われてきて、自分も正しいと思ってきた。それですてきな出会いやいい思い出もしてきた。だからそんなふうに分がつかれていったのだと思う。

**三重** 目の前の事象だけでなく、卒業する時に、こんな力をつけたいという、まわりの子も含めての変容もあれば教えてほしい。

**報告者** 以前の自分なら、「ルールを守れる人」と答えていたと思うが、今は、「誰かとつながれる人であってほしい」と思っている。それが大きな力になると考えている。

**三重** 父はしつげと思ってやっていたことが、結果子どもを傷つけていたことに気付いたとあったが、その思いは子どもに伝えているのか。また、父自身も幼い頃に虐待を受けて育ってきたのか。

**報告者** 父も、どうしたら子どもに愛情が伝えられるのか、悩んでいた。父に相談を受けながら、愛情の伝え方などを提案したり、学校であったことを伝えて家で声かけを促したりした。父も「家でやってみて」「ほめたで」というふうに関力をしてくれて少しずつ行動が変わっていったのだと思う。父自身のことは、分からない。

**兵庫** 他の教職員との連携はどのようにしたのか。

**報告者** 一番悩んだ。入学当初は教職員個々に受け止めていた。一時保護の間に、我々自身も反省し、方向性を合わせていかないとゴールが見えないことに気付き、学校全体で話し合って連携していくことの大切さを改めて確認した。

**徳島** 将来この子が幸せになることと、今幸せでいてほしいという考えのバランスがある。今回の出会いから、今後どのような学級づくりを行っていかうと思うか。

**報告者** 視野が広くなったと気付いた。自分の考え方が柔らかくなった。今の子どもに合った指導が一番だと思っているので、目の前の子どもたちを見て学級づくりをしていきたいと思っている。今、担当としてしづなとかかわっている。担任の目線とまた違っ、しづなやまわりの子たちを見ることもできている。

**協力者** 報告者自身が自分自身の思いを語り、考えを見つめ直し、それを受け入れながら取り組まれたこの経験は、報告者にとってもしづなさんにとっても貴重な出会いとなったのではないか。今後の実践に生かしていきたい。

## —報告5—⑨

### なんで先生の言うとおりにせなあかんの

(滋賀県人教)

#### —主な質疑と意見—

**兵庫** Aさんとのかかわりを通して先生の価値観が大きく変わったが、そのきっかけとなることをもう少し詳しく教えてほしい。また、今学校に通えていないという現状は、学校自身がAさんに合わない、学校自身を変えていかなければと考えられるが、今後学校でこんなことをやってみようということがあれば教えてほしい。

**報告者** きっかけのひとつはタイトルにもある「なんで先生の言うとおりにせなあかんの」という問いに明確に答えられなかったこと。また、Aさんとの対話の中で、「学校は時間が止まっている」という発言があった。「ちょっと待って」という言葉や、みんなが同時に同じことをしていることに違和感もっていた。現在行っているのは、子どもとルールを相談しながら決めていくという実践をしている。それが一番子どもたちにとって納得感があると思っている。

**神奈川** Aさんの3年生までの様子と交友関係について教えてほしい。

**報告者** 今もAさんは「学校には行くべきだ」と思っている。そう思うたびに朝、体調を崩すということがあり、それをがまんして取り組もうとしていたけどやっぱりできないということがあった。また、Aさんには放課後一緒に遊ぶ友だちもいる。また、フリースクールでは4月は一人でタブレットをしていることが多かったが、最近はドッジボールやおにごっこなど、一人でできない遊びをしていると聞いている。

**大阪** 学校に来られなくなった状況の時に、クラスの子どもにどう話していたのか。

**報告者** Aさん自身と相談しながら決めている。来てない理由は言っほしくないけど、どんなゲームをしているのはOKという感じ。

**兵庫** 「学校は時間が止まっている」という発言は、他にもそう思っている子どもが多いのでは。この経験を通して、教室の雰囲気はどう変わったのか教えてほしい。

**報告者** ゴールは同じにして、そこまでの道のりはそれぞれでいいと考え方を変えた。子どもたちはいろいろな学習方法を試す中で、自分に合った方法を探して取り組んでいる。

**兵庫** 「なんで先生の言うとおりにせなあかんの」という言葉を、職員室に返っしてから話したか。まわりの先生からどう言われたか。家庭訪問に行っからの反応も含めて教えてほしい。

**報告者** 最初は相談できなかった。一人で考えた。家庭訪問の後はずぐに共有した。その後ケース会議も行い、保護者や子どもの意向を汲み取り、対立すべきではない、無理にひっぱってくる必要はないという意見があった。ただ、家庭訪問などつながりはもち続けようとなった。

大阪 全員一緒じゃなくてもいいとなった時の子どもたちからの反応を教えてください。

報告者 反応は三者三様であった。だんだんとまわりをみながらできるようになってきている。

三重 A との出会いによって、先生自身が今、目の前の子どもたちのこういう姿が見えるようになったと言えるものは？その見えてきた課題に対して、解決・解消するような実践があれば教えてください。

報告者 徹底的に子どもと話してみることにした。本人が声かけしてほしいタイミングで声かけをするようになった。分からないことや苦手なことも含めて学校が認め合える、共有できる場所になっていきたいので、帰りの会などで友だちから受けたいうれしいことなどを紹介するといった取組は行っている。

神奈川 人とかがかわることで、違う考え方・見方を知って新しい発見があり、自分と出会い直すことにつながると感じた。実践の中でゴールを設定して自由進捗で行うといった取組は、学校の中で広めているか。

報告者 まだやり始めたばかりで共有まではできていない。学年ではできている。

兵庫 今、子どもたちやAさんにどのような願いをこめられているのか。今、日本中で不登校が増えているが、学校だからできる、学校でしかできない学びを考えていかないと学校がある意味が難しくなる。そのあたりをどのように考えているか。

報告者 私が小学生の時、学校が楽しかった。心が通じ合う瞬間が行事やイベントで生まれていたの、子どもたちもうれしく思ってくれるといい。伝わらなくても、話し合えば分かり合えるという経験を積み重ねてほしい。Aさんに対しても同様で、友だちと一緒にできた、まわりの子から得意なことをすごいと言われるようなことを学校で感じてほしいというのが本当のところ。

大阪 かつて「今日も机にあの子がいない」と言われたように、学校にだけ学びの場があった。そこに来れないという差別の現実が見えて、やってこられた。しかし、今はいろんなところでいつでも学びの場がある。不登校の理由は多様であるが、特にAさんにかかわっては、学校の文化・慣習がこじらせてしまっていて学びを保障できていないと感じた。学校にしかできない学びがあって、部落問題学習をする時にAさんはいない。主体的な学びの場をつくらせていない。Aさんの家に行って、「今、こういう学習をしていて」という話をするかしないかは大きい。すでにしているのか、どのような考えか聞かせてほしい。

報告者 いろんな子どもたちの意見を汲み取ることが大切。Aさんもオンラインに誘ってみるなどの工夫が必要。もし難しい場合は家庭訪問をして話をする機会をつくりたい。

大阪 まわりの子どもたちは、Aさんに対してどうとらえているのか。

報告者 一緒に遊んだ子たちやAさんにクラスの

友だちに伝えてもいいか聞いて、いいと言ったらクラスで話している。クラスの子どもの気持ちには、これまで同じクラスだった子とそうでない子には差がある。

協力者 学校ができることは何か、個と集団をつなぐには、どうしなければならないのか。この後の総括討論でも実践されていることがあれば紹介していただけたら。

## 〇2日目の総括討論

三重 現在特別支援学校に勤務している。自分を語ると言っても、障害のある生徒の場合、いつも自分の中にある気持ちを具現化することは難しい。挑戦するなかで、ひとつは、つながることのメリットを言わないといけないと感じている。実習に出ていくと、思っていることが話せないことで、就労を断られることもあり、つながることは社会に出ていくことに必要だねと話した。もうひとつ、人権の授業って言葉でのやりとりが多くなるが、視覚支援のスライドを使って、自分の心の中には、こんな気持ちがあるんだということをやっていた。その中で、一人の生徒が自分のことを話したいと言った。自分のつらい思いや悲しい思いを知ってほしい。それと同じように友だちのつらい思いや悲しい思いも知って、友だちとの仲を深めたいと言った。まだやっている途中であるが、特別な支援を要する生徒に対しての支援も重要だと考え、自分の実践も含めて話をした。

兵庫 1年生で居心地のよさが感じられず、不登校や行き渋りが増えている。学校で今、1年生がどういう状態で生活しているとか、こんな工夫があるのかがあれば聞かせてほしい。

報告者(大阪) 環境の変化に少しずつ慣れていけるように時間を変更するなどの実践をしている。気持ちを伝える時に言葉がたりない時もあるので、表情も見ながらゆっくり伝えるようにした。家庭の力も借りながら、一緒にやっという取り組みしてきた。

報告者(滋賀) 子どもたちが自分で気付いてやるまで寄り添ってやってみる。やりたいことに沿ってちょっとずつやっている。小学校の校内研修に、地域の保育園や幼稚園の先生も一緒に入ってやっている。

兵庫 今の学校のルールや仕組みは、子どもがというより、大人が管理しやすい仕組みになっている。子どもたちがどんなふうに育ってほしいのか、Aさんが大人になったとき、学校でつながりながら学んだりした経験が抜け落ちてしまったら、仲間に伝えられていたらよかったと後悔してしまったり悲しい。Aさんの気持ちも大切だが、一緒に過ごしたいという気持ちは私も共感できる。あきらめなくても考え続けていけたらと思う。

三重 学校でできることを改めて考えると、子どもたちの可能性に気付かせ、伸ばして保障すること。もうひとつ差別の連鎖を断ち切ることができるの

は学校の役割だったり責任だったりすると思う。学校に来づらい子どもに同和問題学習をどう保障していくのかは重要な問題だと思う。もうひとつ、将来と今、どちらも大事だし、そのバランス感覚が大事。学校って2択になりがちだが、いつも2択じゃなく別の方法を考えることも価値がある。子どもたちの居場所、来ていないからと言って居場所がないわけではない。居場所をつくっていくことが大切。

**徳島** 現在不登校は35万人を超えていると言われていたが、校内の研修で校区内の小児科医に話してもらった機会があった。35万人というのは30日以上欠席している子どもの数であって、実際に学校に来づらい子どもはその3倍はいるだろうとの話であった。自分らしくいられない、やっと見つけたのが家であった。保護者や子どもからは、問題は先生であったり、授業が分からなかったりということが多く話していただいた。まずは子どもが笑顔で学校に楽しく来られる今の幸せを願ってほしい。そのために、一人ひとりにもっと話しかけて声を聴いてほしい、それだけでいいとおっしゃられた。本日の報告でも子どもたちの話を聞き、具体的な実践があった。先生が聞いてくれたということが、学校に行ってみようという思いにつながったと思う。私の学校でも、教職員全員と声をかけていこうと小さなことから始めている。

**鳥取** 差別を生まないために、どんな取組をされているのか教えてほしい。

**報告者(滋賀)** 4年生は今、福祉の学習を年間通して行っている。2学期は実際に障害のある方に来ていただき、体験などをした。3学期はそれぞれの体験ブースを作り、全校児童を招待するという準備をしている。

**報告者(大阪)** 手話の学習や車いすの体験などを取り組んでいる。小規模校で縦割り班活動も盛ん。みんなが楽しめる活動を各班で考えてしている。

**報告者(大阪)** 報告した学校だけではなく、市としてどの学校でも小中でカリキュラムとして取り組んでいる。

**香川** 自分のクラスと重ね合わせて聞いていた。どんなふうに向き合ってあげたらいいか、何もできていないなという無力感も感じながらいるが、その子が毎日学校に来てよかったと思えるようにしたいと改めて思った。放課後登校している子の思いを聞く機会があった。やっぱり内に秘めている思いはあって、「制服を着たくない」や「一斉授業を受けたくない」といった思いがあり、学校のシステムを考え直さないといけない、その子にとってよりよい場所になるように考えていかなければと思った。暗い場所に教職員が立っているかという話を以前聞き、心に留めている。しんどさや困っている思いをかかえている子がちゃんと見えているか、考えられているか、改めて自分の見方や権利について考えるきっかけになったので、早く子どもたちに会いたいと思うと同時に、もっと考え直すところが自分にもあるなと思った。

**熊本** 報告を聞いて、知ることが大事だと学んだ。子どもが差別してしまうのは、子どものせいでもないし、そういう環境をつくっているのは誰かを私たちはこうして考えて、子どもたちに返すということをやっている。まわりの環境が空気のように差別心をすりこんでいっているのではないか。だからこそ、子どもたちの中から出てきた言葉に、教職員が気付けるかどうか、人権感覚の豊かさを育成していくことが大切と感じた。子どもに対する姿勢や取り巻く環境を見つめ直していきたい。

**山口** それぞれの報告から、中間に立っていることが勉強になった。子どもと子ども、子どもと施設、子どもと保護者、子どもと先生の求めるものなど、中間に立つ人と書いて仲間という。これからも立ち位置を大事にしている人がいることは、社会に出る子どもたちにとって大切であると感じた。

**大阪** 最近の心ない動画や書き込みは、本校の校区にも関係していることもあるが、「そんなんちゃうし」と悔しい思いもしている。怖いのは、何も知らない子どもは、その情報を鵜呑みにして、加害者にも被害者にもなりうる。そうならないように職員間で話し合っている。人権・部落問題学習を子どもの姿から行っていくことが必要と思っている。個人的には、市全体でできているかはまだあやしいところはあるが、自分の幼少期を考えた時に、人権学習を積み上げているかと言われたら、できておらず知らず知らずのうちに人を傷つけてしまっているかもしれない。だからこそ、全国の人が学ぼうとしているこの空間がすばらしいし、学んだことを持ち帰って、責任をもって今すぐにでも広めていきたいと思う。

**三重** 自分は初任者で分からないまま実践している。全部で100人くらいの中学校。なかなか安心して話せる空間が難しく、いろんな活動ができたかなという反省があるので、来年からがんばりたい。

**三重** 報告を聞いて、価値観を壊していった更新していくことが大切だと感じた。私も自分の価値観が壊された経験があった。特別支援学校では、こだわりの強い子どもがたくさんいて、私も「それでもいいやん」と思うようになった。時には型にはめられるかなと悩んでいたこともあったが、その子をどう受け入れていくか、自分がどう変わっていくかが大事だと思った。

**三重** 今まで出会った子の顔を思い浮かべながら報告を聞いた。私もこうあるべきだという気持ち強い方だが、それで型にはめることで子どもたちもしんどかったらうなという出会いもたくさんあった。この報告で語りつくせない葛藤もたくさんあったらうなと思いながら聞いていた。また、かかわった子どもたちが来られなくなったことのネガティブさ、異動になって見守っていたのではなく、置いてきてしまったという後悔もある。子どもにとって先生がみてくれているという安心感があったとういことを実践された報告であった。私も明日からまたがんばろうと思った。

兵庫 実践を聞いて、「幸せって何だろう」と考えた。うちのクラスのAはキャリアパスポートに「何で学校行かなあかんねん」と書いていたが、今は「学校って別に悪いところじゃない」と書いている。その子にとって幸せって何だろうなと考えたとき、その子の存在がみんなにとっていい影響を与えているんだよということを伝えていきたいと決めた。つながっておく、聴くこと、はなれているけどそういう大人、教師がいるよということが大事。また明日からAとつながっていきたいと思う。この場所、この熱量、同じ方向に向かって考えているこの場所にいれることが私は幸せです。

兵庫 うちの市では、今度の春に「学びの多様化学校」が作られる。学びの多様化学校ができたからと言って、不登校問題は解決しないと教育委員会に言っている。地域の学校こそが変わらないと子どもたちは救われない。皆さん方でまた考えていただけたらと話をした。今回、皆さんのレポートでは、子どもや保護者と話をし、信頼関係がないと進まなかったと思う。その証がこの冊子だと思って読ませていただいた。

大阪 特に今日の2本のレポートを聞いていて、学校教育の在り方が問われているとひしひしと感じた。今は、重心みたいなものが教職員に寄っている、もっと子どもの方に寄せていく必要があると感じている。しかし、そうしようと思っても、教職員の数に対して、業務の量が多すぎる。また、安全を確保するために、管理しやすい環境をつくるのが大事だという意見もある。そのような中で、人権学習の時間をとることになかなか踏み込めないという先生もいる。同和教育を進めていくことと私たちの労働環境は密接にかかわっていると思っている。子どもも大人も主体的に学ぼうとするなら、気になるその子の家に行きやすい気持ちのゆとりがほしい。人権学習よりも教科学習を優先しようという先生に対して、せめてどうしようかと考えている。人権を教科化するという案はどうか。表に見える現象だけで決めつけるとよくない。その言動の裏側、向こう側にある要因を見ようとする行為も大事だが、見えた時に差別の実態が広がっていることもある。それを見た時にはじめて子どもと向き合うことになる。そばにいる、横で寄り添うでは向き合うことにならない。できるだけ正面で向き合うことが差別をなくしていくことにつながるのではないか。しかし、子どもたちは様々なボールを投げってくる。それを受け止められるよう、いろんな先生がいろんなミットをもって、一緒に球を受けたいと思う。昨日・今日と子どもをつなぐことの話が出たが、同僚とのなかまづくりも大切だと改めて感じた。

三重 いくつか質問をする中で、改めてこのように対話することが大事だと感じた。と同時に、子ども、保護者、地域の人と対話できていたかと思った。以前、ある地区の保護者から、「うちの子には立場を伝えたくない」と聞いた。その後、その方の叔母

にあたる方と話をした時、「実は先生のこと、待ってたんやで」と言われた。その時、「この子には、こんな力をつけたいんや」と返せていたか。返せていなかった自分自身を振り返った。様々な人とやりとりをして、本気の営みを行っていくことが大事だと改めて感じた。

大阪 この分科会に参加して、今かかわっているAと重ね合わせて聞いた。Aは「お母さんにほめられたい」と言っていたことが記憶に残っている。Aの母も祖母に育てられ、子育てのロールモデルがないまま育ち、Aもヤングケアラーであった。結局Aは転校した。他の先生に聞くと、「それは部落差別だ」と教えてもらった。それからたくさんの出会いの中で、プラスの出会いをさせたいと思うようになった。地域とつながる中で、子どもたちどうしがつながるような学習をしていきたい。

### ○報告者の感想

高知 就学を見据えた中での保育について改めて考えた。子どもたちの将来や人生を考えたかかわりの大切さを学ぶことができた。子どもの興味・関心からつながりも生まれる環境をつくっていきたい。

愛媛 実践や今までの話を聞いていて、人とかかわる力をつけることが、差別の場面に会ったときに、スルーするのではなく、気付ける子になっていくのだと思った。差別や間違った発言に気付ける子どもたちになってほしい。みなさんの報告から熱意とつながっていることを感じた。

大阪 この場での出会いが貴重な時間となった。これまで自分も押し付けているところがあったのではないか、もっと話を聞いてぶつかっていきながらもう一度がんばっていきたいという力をもらった。中学校として、これまで積み上げてくれたものをさらに積み上げ、卒業していくことが必要だと感じた。自分自身ももう一度学び直せた。

大阪 一言で言うと、すごく力をいただいた。この報告の準備をする中で、そうやな、しずなってこういうところあるな、しんどい時でもがんばってるやんと改めて気付けた。明日につながる力をいただいた。質疑応答の中で、自分のめざす子ども像も変わっていきっていると気付けた。温かい空気ですごく幸せな空間でした。

滋賀 発表前はどきどきしていたが、いろんな都道府県でみなさんも悩みをもたれているという話も聞き、勇気をいただいた。明日からまた子どもたちと安心して向き合うことができる。考慮・思慮・配慮の力を伸ばしていきたい。

### ○2日目のまとめ

大阪市からは、『こうあるべき』から『これもいいやん』への変換～しずなとの出会いを通して～という報告をしていただいた。厳しい暮らしの背景をもつしずなさん。母親やおとなの愛情を求め、不安定で荒れるしずなさんに、「こうあるべきだ」と話

すのではなく、しずなさんのことを大切に思う気持ちを伝えた報告者は、初めてしずなさんと向き合うことになる。報告者が一人ひとりに向き合い、寄り添うことで、しずなさんも周りの子どもたちもお互いを大切に始めた。討論では、「こうあるべき」という学校文化や教職員の価値観の問い直しや変容の必要性についてご意見をいただいた。報告者の価値観だけでなく、生き方の変容が、しずなさんや周りの子どもたちの変容につながったことも確認された。私たちが「こうあるべき」という価値観を問い直すことは、子どもたちのほんの少しの頑張りや成長を認めることだけではなく、何が苦手なのか、しんどいことは何か、子どもたちの差別の現実を見取り、苦手さや弱さも丸ごと受け止め、一緒に考えていく実践者へと変容していくことではないだろうか。またそのような変容は、子どもたちとの出会いや人とのつながりの中で起こる。だからこそ私たちは、子どもたちの事実と向き合いより添っていくことが大切なのではないだろうか。

滋賀県からは、「何で先生の言うとおりにせなあかんの？」という報告をしていただいた。Aさんの「何で先生の言うとおりにせなあかんの？」という発言が、報告者のこれまでの教育観を覆した。学校に来なくなったAさんに、『みんなと一緒に』のどこがAさんを苦しめたのかと、報告者の「使命感」が行き場のない無力感に変わっていった。家庭訪問で、「ただ純粋に、『今のAさん』のことを知ることから始めてみよう」という報告者の変容が、報告者の見る世界を変えていった。Aさんの姿を見て、一人ひとりの興味やペースに寄り添う学びのスタイルへと変換させていかれた。ただ一方で、報告者は学校の意義や教師の役割についても問われていった。

討論でも、学校文化の問い直しや、「学校でできること、学校にしかできないことは何か」ということについてたくさんのご意見をいただいた。自由進度学習についてのご意見もあった。どのような学び方をするにしても、私たちは「豊かな学び」の中身を問いたいと思う。また、不登校が、共に学ぶ機会や人権学習の機会、仲間づくりの機会を奪っていると考えたとき、仲間のつながりの中でこそ共に育つこと、違いがあるからこそそれらを認め合うことができる学校の意義を、改めて考えていきたいと思う。

この2日間、この会場でたくさんのお出会いや多くの学びがあった。熱い思いやあたたかいぬくもりも感じる事ができた。また、鋭い指摘も受けた。すばらしい分散会討論をつくり上げてくださった報告者の皆さん、参加されたすべての皆さんに感謝したい。第77回全人教大会は、埼玉県を中心とした関東ブロックで開催される。確かな実践、豊かな取り組みを積み上げ、事実と実践をお互いに持ち寄って、再びお会いすることを願い、実践報告協力者のまとめとする。